

「子供は単に小さな大人ではない」と言われ、小児の診療ではさまざまな特性に応じた配慮が必要である。小児特有の疾病や小児期発症の疾患も多く、それらは理学療法の対象となる場合もある。また、そのような子供たちもやがて成長し、罹患した疾患や治療による問題を有した状況で理学療法の対象となることもある。本特集は、小児整形外科疾患の理学療法について、最近の治療方法の進歩や理学療法の取り組み、想定される将来の問題、それに対する備えなど、理学療法士が知っておきたい知識や技術の整理を行うことを目的として企画した。

■小児整形外科理学療法における大事な視点は何か(押木利英子論文)

小児整形外科理学療法は日本の「療育」のなかで先駆的役割を果たしてきた。治療対象や方法は変遷してきたが、さまざまな原因による四肢変形や短縮、姿勢・運動障害を対象に専門的なリハビリテーションを行う理学療法士は絶えず存在感を保ち続けている。ただし、子供は大人の縮小版とはいかず、成長、発達を考慮した理学療法が必要である。筆者の経験を振り返り、さらに現在の小児理学療法のおかれている状況を整理して、留意すべきポイントを5つにまとめ、今後の展望を記した。

■脳性麻痺児に対する整形外科的治療と理学療法(與儀清武, 他論文)

脳性麻痺に対する外科的痙縮治療は重症度に応じて適応と組み合わせを考え、ゴールを見据えて計画し、適切に症例を選択すれば良好な痙縮軽減効果を得ることが可能である。理学療法士の役割は評価と目標設定、運動療法と達成度の確認、長期的視点で重症度に合わせた理学療法を進めることである。沖縄県では多職種・多施設合同カンファレンスを通して治療戦略が共有され、小児から成人まで一貫性のある施設を超えたチームアプローチを行っている。

■小児股関節疾患の治療と理学療法(伊藤順一, 他論文)

小児股関節疾患は、発生頻度も低く、発症年齢も一定しないことが多い。さらに、乳幼児期から発症するものは、運動発達に関してsequelaを残すこともある。理学療法では、発達途上にあるこどもの心をケアし、保護者の忍耐を支えることも必要になる。本稿では、小児股関節の代表的疾患である先天性股関節脱臼とペルテス病を題材として、理学療法の実際を述べる。

■二分脊椎の治療と理学療法(木村正剛論文)

二分脊椎に対するリハビリテーションは移動能力の獲得や身辺処理の自立、変形の予防を目的として理学療法や装具療法、手術療法が選択される。一方、二分脊椎において高い合併率のある水頭症により生じる病態に対して理学療法の対象として捉えた報告は乏しい。本稿では水頭症を合併した二分脊椎児に対する視空間認知と非言語性学習障害を考慮した運動療法について述べる。

■側彎症の治療と理学療法(米原久美子論文)

脊柱側彎症全体の約70～80%を占める特発性側彎症があり、そのなかでも思春期特発性側彎症は臨床上最も多くみられる側彎症である。その成因はいまだ明らかにされておらず、有効な治療法も装具療法と手術療法のみである。運動療法の目的は、装具療法の補助および側彎の進行予防であるが、後者のエビデンスは確立されていないのが現状である。本稿では当院における周術期のリハビリテーションも含め運動療法について述べる。

■骨系統疾患の治療と理学療法(櫻井吾郎, 他論文)

骨系統疾患の大部分が、有効な診断・治療法がない難病であり、成長障害、関節の機能不全や神経の障害による運動機能障害などさまざまな障害が発生する。低身長や骨の変形に対して施行される骨延長術や変形矯正術では、関節可動域制限や移動能力の低下に対する理学療法が中心となる。また、矯正終了後も成長障害や、アライメントの変化に伴う新たな運動器の障害リスクがあるため、長期的なフォローが必要である。

■血友病性関節症の治療と理学療法(織田聡子論文)

血友病とは一般に男児に発症するX染色体連鎖劣性遺伝形式を示す出血性疾患である。関節内出血を繰り返すことにより血友病性関節症を発症し、関節症が進行すると整形外科的治療が必要になることもある。血友病性関節症の予防のためには小児の時期から出血予防を行い、運動習慣をつけることが必要であり、患者のQOL維持・向上のために包括医療で患者をサポートすることが重要であると考える。